

報道関係者各位

2020年8月5日

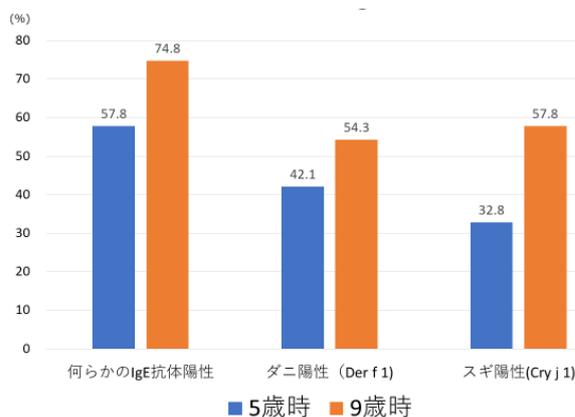
国立成育医療研究センター

9歳の約75%がアレルギー検査で陽性！
小児アトピー性皮膚炎や喘息症状（喘鳴）の経過には複数のタイプがあり
経過や症状に合わせてベストな治療を行うことが重要

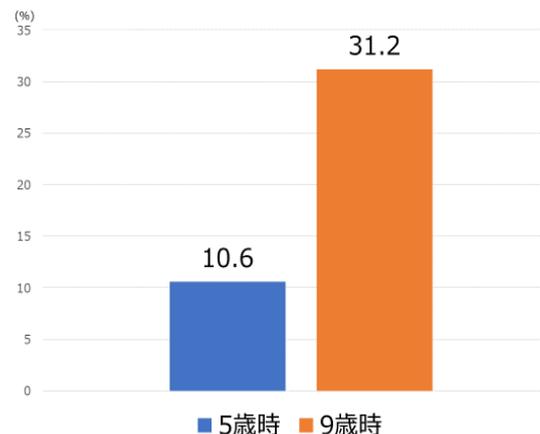
国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵、理事長：五十嵐隆）のアレルギーセンター大矢幸弘、山本貴和子、羊利敏のグループは、同施設で2003年から一般の小児を対象として行ってきた成育コホート（出生コホート研究）から、どのくらいの子どもにアレルギーがあるのかを分析しました。その結果、5歳から9歳で鼻炎症状を有する子どもが3倍に増加することが分かり、また、9歳時にはアレルギー検査陽性者が約75%にもなることが明らかになりました。

さらに、小児アトピー性皮膚炎の経過には、①アトピー性皮膚炎なし・ほとんどなし②乳児期のみアトピー性皮膚炎③遅発型アトピー性皮膚炎④乳児期発症持続のアトピー性皮膚炎4つのタイプがあり、気管支喘息症状の喘鳴の経過には5つのタイプがあることが明らかになりました。

このことから、アレルギーについてはそれぞれの経過や症状に合わせて最適な治療を行うことが重要だと考えられます。



【5歳時と9歳時におけるアレルギー検査の陽性率】



【5歳時と9歳時における過去1年間の鼻炎症状の発症】

【プレスリリースのポイント】

・アレルギー検査でIgE抗体が陽性だった子どもは5歳時から9歳時にかけて増加傾向で、

9歳時の約75%が何らかのアレルゲンに対してIgE抗体陽性でした。54.3%が抗ダニIgE抗体陽性、57.8%が抗スギIgE陽性で、半分以上の子どもでダニやスギに対してIgE抗体が陽性であることが明らかとなりました。

- ・鼻炎症状を有する子どもも5歳から9歳で3倍に増加しており、9歳時には約30%の子どもが鼻炎症状を有することが明らかになりました。

(論文タイトル: IgE responses to multiple allergen components among school-aged children in a general population birth cohort in Tokyo.

掲載: *World Allergy Organization Journal*. 2020;13(2):100105.

<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S1939455120300089?via%3Dihub>)

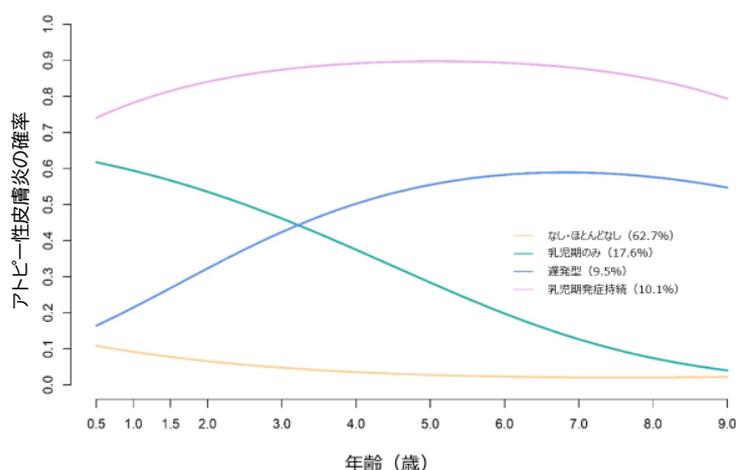
【アトピー性皮膚炎の4つのタイプ】

・小児アトピー性皮膚炎の経過には4つのタイプ(なし・ほとんどなし 62.7%、乳幼児期のみ 17.6%、遅発 9.5%、乳児期発症持続 10.1%)があることが判明しました。同じアトピー性皮膚炎の診断でも子どもによって経過が異なることが明らかとなりました。(論文タイトル: Four phenotypes of atopic dermatitis in Japanese children: A general population birth cohort study.

掲載: *Allergol Int*. 2019;68(4):521-52

<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S1323893019300322?via%3Dihub>)

小児アトピー性皮膚炎のフェノタイプ

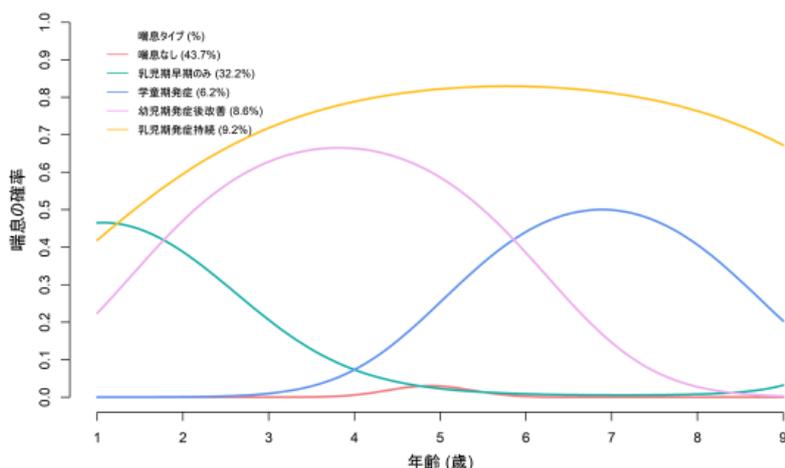


【喘息症状の5つのタイプ】

・喘息症状である喘鳴の経過には5つのタイプ(喘息なし 43.7%、乳児期早期のみ 32.2%、学童期発症 6.2%、幼児期発症後改善 8.6%、乳児期発症持続 9.2%)があることが明らかになりました。アレルギー症状の経過は一樣ではなく、個別対応が必要であることが示唆されました。

(論文タイトル: group-based trajectory analysis. 掲載: *Pediatr Allergy Immunol*. 2018;29(6):606-11.

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/29698561/>)



【研究手法】

同センターで出産予定の妊婦（1701人）と、生まれた子ども（1550人）を対象に行っている成育コホート（出生コホート※1）のデータを使用・分析しました。

2003年から2005年に妊娠した母親を登録し、現在も母親と誕生した子どもを妊娠中から継続的に追跡し、アンケート調査、診察、血液検査により、喘息などのアレルギー性疾患や症状、IgE抗体価などを調査しています。病院を受診した子どもを調査したのではなく、当センターで出産した一般集団の子どもを追跡し、過去・将来にわたって追跡調査した縦断的研究（前向きコホート研究）です。過去にさかのぼって情報をあつめて比較する後ろ向きコホート研究や、現時点のみを調べる横断研究よりエビデンス・レベルの高い疫学調査です。

※1 出生コホート研究：子どもが生まれる前から成長する期間を追跡して調査する疫学手法です。胎児期や小児期の環境因子を含め様々な曝露因子が、子どもの成長と健康にどのように影響しているかを調査します。大人になるまで追跡する場合があります。

【今後の展望・発表者のコメント】

- ・日本では小児アレルギー疾患の急増が問題になっており、5歳から9歳での鼻炎症状の増加が明らかとなりました。また、何らかのアレルゲンに対してIgE抗体陽性の9歳時の子どもが約75%もいることからアレルギー体質を持つ子どもが非常に多いことが判明した。
- ・アトピー性皮膚炎や喘鳴も、子どもによって経過が様々です。乳児期のアトピー性皮膚炎が必ずしもその後良くなるわけではありません。子どもの症状や、今回の研究で明らかになった経過のタイプに合わせた最適な治療が必要です。

【問い合わせ先】

国立研究開発法人 国立成育医療研究センター

企画戦略局 広報企画室 近藤・村上

電話：03-3416-0181（代表）

E-mail:koho@ncchd.go.jp